和文教科書

徒然草抄

一卷

成五十七年

共八

ホ 2
218
1

源歌子編輯

和文教科書

東京書肆　中央堂發兌

東京高等學校圖書
門人教科書
第218
卷1

和文教科書序

近時學國文者。率以勢語源語爲圭臬。其筆洵美矣。而往往有猥褻不可爲訓者。且委曲繁縟。雖專門之徒。猶或難之。況授諸少年女子。勞多功少。而又無補於風化。識者病焉。香雪女史才操卓然。其學無所不窺。尤邃於

源歌子編輯

和文教科書

中華書局發行

東京帝國大學圖書之印
門 利10 ホ2
號 218
卷 1

和文教科書序

近時學國文者。率以勢語源語爲圭臬。其筆洵美矣。而往往有猥褻不可爲訓者。且委曲繁縟。雖專門之徒。猶或難之。況授諸少年女子。勞多功少。而又無補於風化。識者病焉。香雪女史才操卓然。其學無所不窺。尤邃於

國書頃者
皇后宮有旨設華族女學校女史幹
其事兼任教授特憂初學作文無軌
範而其業難進遍閱古人著作選其
文美而旨正者名曰和文教科書乃
去猥褻而存典雅削繁縟而取簡明
猶輪船渡海鐵路行陸縮長爲短轉

迂爲直學生之捷徑自此開矣女史
姓源名歌子香雪其號淑德嫺禮有
古列女之風非區區詞章衒才者宜
乎其爲
皇后宮所寵遇也編成求序余喜爲
題一言於卷首
明治十八年十一月

從四位勳一等子爵谷干城撰

和文教科書

例言

一和文學ハ、和文の構成を理會せしめ、又ハ和文を記述せしむべき、學科なれバ、先づ、和文の上に切要なる、諸般の法則ハ、教ふべきなれ、若し其法則を教へて、徒らに書を讀ゝ歌文を作らしめんとせバ、到底、この學科の要領ハ、得しむることと、能ハざるべし。今和文學の法則として、教ふべきものをいへバ、第一に、發音、口語の上の發音、および五十音の變化を教ふ。第二に、假字づかひ、

清音濁音、音便、字音の假字を教ふ。二十時間、第三に、ことば、歌文の解剖より得たる、名詞、形容詞、動詞、副詞のたぐい、なびき、ゆく、ゆくなどの性質をたもつ、切要なる、諸法則を教ふ。此教授の時間、おほよそ九十餘時間、第四に、歌文の構成、種々の性質をたもつ順序なる、詞を、種々の文章、種々の歌を作るに、切要なる諸法則を教ふ。此教授の時間、おほよそ五十餘時間、第五に、五十音の〳〵のへるわ。名詞と副詞とに從ふ五十音の假字を教ふ。但し、此教授の時間、おほよそ三十餘時間、序ハ、必しもかくの如くまるでしと、ふみハあらず。強ふ發音あどハ、今とみよ、教ふづくもあらねバ、五十音の變化のみを教へて足るべ

くまた、五十音ハ、歌文構成の次よりもべき條理あれども、假字づかひの、次におくべ、便りあらんこれハ、家初より、作文詠歌、だんだんとなれバ、讀畫を、課もるべ。されバ、此學科を、教ふるハ、先づ、法則を教へ、次に讀畫と、作文詠歌とを、課もべし。讀畫ハ、法則の、古文にあらはれたる、詠ぶ、及び其變化を、理會せしむる為にて、作文詠歌ハ、法則の、運用を、熟達せしめんの目的あり。作文詠歌ハ、假字づかひと、五十音とを、教へをもて、課もべし。讀畫ハ、家初より、課もるも、よかるべし。

一　此書ハ、かゝみよいへふ、和文學の讀書の課を、供

ふる書あり。從來讀書の科まハ、竹取物語、宇津保物語、住吉物語、落窪物語、源氏物語、榮花物語、宇治拾遺物語、徒然草、土佐日記、十六夜日記などやうの書を、假用し來りしかども、其書どもハ、もとより教科書としてかきたるまゝなれバ、假用まだるも、不適當を覺ゆるところ、少からず。殊ニ男女のあうしひなど、えもいはぬふしぶしへありて、教への席ニハ、もちいづべくもあらぬさまなれバ、此書ハ、上の物語日記などより、和文を學ぶに、便なるまんと、思ひ立つるふしぶしを、えらびとりて、ぬきほとハ、土つるふり。

一　此書ハ、上にいつる如く、和文の法則を、理會せしむる料なれバ、文脈のさとり易きものより、始むべしかなれども、此書の時代などをもて、順序を立つべきニハあらず。殊ニ、和文ハ、作者みな古文にならひたれバ、其時代のみをもてハ、文体の新舊も、定むるべき理りさへあれバなり。

一　此書ハ、漢文の上ニたつる、辭、序、說、辨などの、名目をたてず。また、照應抑揚、伏案、伏線な

どのふしをも示さゞぞゝは先づ、彼の辞序などゝふは、書きたるものゝ上までの事まて、辞といひ、序といさんも、名詞、動詞の配置さゝかゝはるまもあゝべ。照應抑揚などゝふしも、書く人ゝの心ゝまてそこと、定まりたるゝゝろのあるまもあゝねば、法則さして教ふべきまはあゝず。殊さ、此は、もと俗辞といふ、一種の文章学上代、ことあるべきなり。

一 此書は、正格なる、文章のゝをとりて、平家物語、源平盛衰記、太平記やうの、謡ひものゝ、一変

たる、類ひいとゝゝべかゝる文章は、歌文の構成ぞとに、ならひえたゝんまは、書んことのかゝゝ

ざめればなり。

一 此書、さきまは、故事辞義などの、ふかゝきふしゝは、其ゝを、頭書まもと、思ひしかど、さば

うの事は、此書を講ずる人の、おゝざゝんも、

あるまゝ、ゝれば、とて、書きさしてやみぬ。かつ

故事辞義などは、ゝ人ゝまて、取もし捨つる

もあれば、ゝれ、きはやかゝ定めたゝんは、中ゝ

ゝんとてなん。されば、今は、たゞゝ書の巻名

なゞるものゝ頭書にとるをり。こゝ其原書をた
づねんをり、料るもとの心をとゝのへをり。

明治十八年十二月

和文教科書一之巻

美濃　源　歌子　編輯

徒然草ぬきほ

つれ〴〵なるまゝに、ひぐらし硯にむかひて、心ふ
うつりゆく、よしなしごとを、そこはかとなくかき
つくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。い
でや、此世にうまれては、ねがはしかるべきこと
こそ、おほからめ。みかどの御くらゐは、いともか
しこし。位のたかきは、いとゝもかしこし。その
らぬぞ、やんごとなきの人は、さまこそあさ

うるわ。たゞびとも、ゞねわるゞたるはるきはゝ、
ゆゝしとみゆ。そゝ子うまごゝもでゝはゝれまたれ
ど、ゝ狂るゝめゝし。それゝうきもつかゝゝはゝどり
つけつゝ、はゝあゝいゝきゝわがゝるるもみづゝう
はゝいみゞとゝはゝらめゞ、いとくちをゝ。法師ば
うわ、うらやまゝかゝぬものいあゝゞ。人ゝはゝ、水
のはゝれやうに、ゝはゝるゝゝと清か納言ゞかゝ
るも、げゝさるゝゝとぞかゝ。ゝきほゝいまうにの
ゝきわたるにつゝて、いみゞとゝみえゞ。增賀いゞ
りの、いゝんやうに、名聞ぐゝく、佛のほをゝ

へゝ、たゞゝんとぞおゞぶゆる。いゝぶゝるのゝをゝ
てゞとゝはゝ、ゝあゝまほゝきかゝもありゝん。
人ゝはゝ、かゝゝちあわゝきゝみをゝぐれたゝんゝそゝあゝ
ゝほゝかゝるべゝゝれ。物うちいたゝゝきゝゝくか
らゞぞ。あゝきやうあわて、詞おゝかゝぬゝそゝあゝう
ぞむうはゝまわゝゝれ。めでたゝとみる人のゝゝ
ろおゝちゝせゝゝゝ本性みえんゝそゝちをゝか
ゝまべゝゝれ。品かゝゝちゝそゝうゝれつきたゝめ心を、
ゝまゞゝう賢ゝわ賢ゝゝも、うつゝゝばうはゝゝゝざゝんが
ゝゝちゝゝろゝざゝまゞよき人も、ざえゝくゝあわぬれば、

さるくぶわ、かほるくさげなる人なも、さまざまに
てかゝぐ、けおさるゝ、ゝそ、ほいなきわざなれ。あ
るたきこゝふ、まことゝき文の道、作文お、奇、笈絃
の道ゝ、有職にゝ事のかゝ、人ゝ鏡ならんゝそ、
いみじかるべゝれ。まるど、つたなかゝどはゝ見
かき、ゝ、おゝしゝて、拍子とわいゝまゝうまるもの
うゝ、げこゝるゝぬゝそ、をのこゝふゝゝれ。
不幸にゝうれへゝ、ゝ、ゝづめる人のかゝらおろゝるど、
ふつゝかゝ、おもひゝたるゝふあゝで、あゝうふ
きゝに門さゝこめて、待つこともなく、あゝゝく

らゝたる、さるかゝくにあゝまほゝ。顕基中納言の
いいゝん、配所の月罪なくてみんこと、さもおぼ
えぬべゝ。
神無月の比、くゝも野といふを過ぎてある山
里にたづよいる事あゝにばゝるのなる苔むほ
そ道をふゝみて、心ぼそくもみなゝたる庵あり。
木葉にうづもゝ、かゝひの雫なゝでい露おと
なふものなゝ。あゝ柵ゝ、竜もみちなどをちゝ
ゝゝる、さもがゝ、もむ人のあれがなるべゝ。かく
てもあらんくゝよと、袁さみるほどふかなるの

庭に、おひきなる柑子れ木の、枝もたわゝに、なり
たるを、まはりをきびしくかこひたるこそ、こ
ゝろとさめて、必ずふうまうらぶと、おぼえ
しか。

おなじ心なるゝ人と、さあやうに物語して、おの
しきことも、のはうるきことも、うらるくいい
ふぐさまんこそ、うれしかるべきよ、さる人ある
まじくれば、つゆたがはざるんと、むつひおふ
んい、ひとりあるこちやせん。たがひよいはん
ほどのことをば、げよと、きくかひあるものから、

ひとゝうたがふも、あるん人こそ、我いさやい
おなじふなど、あるそひよくみ、さるかゝさぞとも、
うちかさゝはぐ、つれづれなぐさるめとおもへど、
げよいをこしからつゝも、我とひとりかゝぐ
らん人い大かるのゝるゝごと、つゝん縁こそ
あるゝめ、まめやうれ心のなるをばるかよへぐる
所のありぬべきぞわびしきや。
和奇こそ、おのしき物なれ。あやしれ、さづ山ふ
つのさこざも、いひいづれがおもしろく、おそろ
しきるれさこも、ふもるの底といへば、やさしくふ

見ぬ。此こゝろの奇は、一ふしゝらくいひうるへたりとみゆるはあれど、古き歌どものやうに、いうにぞやことばのほうよあはれよけしきなどゆるさるし。貫之ら、系によるものゝなくにといへるは、古今集の中に、奇くぢとうやいひつゝへたれど、今のせけ人のよみぬべきことがゝとをみえに、其世の奇よは、ひらゞく詞、此たぐいのみおほし。此奇にかざりてかくいひたてられたるも、さうがゝし。源氏物語よは、物とはなしにとぞかゝる。新古今よも、詞ゝ松さく岸にさびしきといふうたをぞいふなる、まことに、をこしくぶけたるゝ、をかゝくよもやみゆゝん。されど、此奇も、衆議判の時、ゝろしきさゝぶあれて、後のもことさゝ小感じおほせ下されゝゝ、家長ら日記よはかゝり。奇の道ゝ、ゝろしへよかはしぬなど、いふことあれど、ゝるやゝ。今もよみあゝ、松まで詞、奇枕もむゝの人れよあるは、さゝよ、切形ものにあゝぞ。やをくいるかにして、姿もきよげよ、あはれもふゝくみゆ。梁塵秘抄の郢曲のことばこそ、又あはれなることは、たかゝうめれ。むゝの

本居翁の、詞のむ乃緒よ、この新古今集の奇は、てるそ遠ひるれむ、ゝろしとを、いくるをゝんといふ。されむ、姿のくぶけるるれるそ、あゝぞうべし。

人ハいのにいいきてゝるゝことくさも、みかいこ
ゞくきこゆるゝ也。
いづくまもあれ。さぼ〜旅だちるゝそめぞむ
こゝろもれ。そのわるゝわ、ちかゝこみあかき、為
あゝびゝるゝこゝろ、心里などハいとめるれぬ事
のゝぞ、わゝうる。都へたゝうもとめて、又やる。其
事、かの事便宜よわゝるゝなどいいやゝるゝたに
かゝゝれ。さやゝうの所ゝてゝて、萬に心づゝいを
ゝるれ。もてる調度ゞで、ゝきハゝ〜、純ある人が
たゝちゝき人も、つねゝちわハ、たゝゝとゝてみゆれ。

寺社などに、志のゞして、こもりたゝもたゝゝ。
人ハ、わのれをつゞまゝやゝうにゝ、をゞわを退けて、
財をわゞ、ゞをもゝさゞ〜ざゝんぞ、いゝゞかゝるべ
き。昔より、賢人の富ゝふまれるわ。もろゝに、許
由といしつる人ハ、さゝゝふ分に志ゝゞる、たく
はへもなくて、水をもふまゝて、さゝゞげて、のみゝる
をみて、なゝしさゞといふものを、人のえゝせた
ゞゝれハ、ある時、水の杯をかけまわゝるゞ、風ゝ
ふゝれてなゝゝるゝを、かゝゞまゝとてゝて、又
まにもゝゞびてゞ、水もものみゝる。いゝゞぼゝ心のう

○これらの詞は、あの時をいふ位語なり。

ちぶ〜かりくん。孫晨は、冬月は、ふとまるゐて、
ゐら一束ありくるを、夕はこれをふし、朝はを
をさめくわ。もろこしの人は、是をいぐと思へ
ばこそ、つゐ〜とぐめて、世もつくへくめ。これ
らは人はかゐりもつまべかゐば。
をりふしのうつりかはるこそ、物ごとに、哀なれ。も
のゝあはれは、秋こそまされと、人ごとにふめれ
ど、それもさるものにて、今いときは心もうきた
つものは、春のけしきまこそあめれ。鳥のなくなど
も、とのみに聲めきて、のどやかうなる日、霞よ、か

きもの草、もえいづるころ、やゝ春めきて、あ
みゐりて、花もやう〜ひらけきたつほどこそあ
れ。をりしも、雨風おつづきて、心あるたびしくち
ゐ過ぬ。青葉になりゆくまで、萬にたゞ心をのこ
すなやまも。花橘は名こそあれ。猶梅のかを
ひこそ、いとへがたけれ。立ちくるこしう思
ひいでらる〜。山吹のきゝげは、蓑みおびつゐる
きさまにたゐ、もべてだにいとをてがゐ美ことた
ほし。灌佛の比、祭の比、若葉の梢、をぐ〜しげゐ行
ゆく程こそ、世に哀も、人の意しさも增れと、人の

。おほす
。おほせらる
この詞は、源氏少女巻よ（まことに）く行へと、おほせ〻（で）とある如くなり、命令をいふ詞なるべき、其命令をうくるものよりは、捨遺集の小序よ（教奉れとおほせられ〻れば）とある如くおほせらるといふなり。それよりうつりて、後はそれ、貴人の宣ふをば、すべて、おほせらるといふなり。

わかせられしーにて、げみさうものなれ。五月あやめふく比、早苗とるころ、くひなのたゝくなど、心ぼそかりぬべき。六月のは、あやしきまに〻熱のさらくみえて、かやアヤ火ふをぶるも、あはれなり。六月後又たうー。

棚機まつるとて、なまめかしき下葉いろづくなど、わさ田うゑほすなどとりあつめうるさとも、秋のこゝぞおもかる。

又野分のあしたなど、ものいひつゞければ、みな源氏物語枕草子などに、さとふりまれど、なほすぐこ

るやうなれども、そこ〻に対話の上のことなどを、たゞ、宣ふことを、おほせらるといふなり。あらぬを、徒然草よは、たゞ宣ふといふべき所をも、常よ、おほせらるといふ。甚しきは、すべて、徒然草よは、対話ならぬとのけちめおぼらげうれむ、思ひすぐふべからず。

と、又いまさらに、いはずともあるべけれども、事いとぬるき、腹ふくるるばかりまさるせつゝ、あぢきなきまもとびて、かいやりもつべき物なれば、人のみるべきもあるべきにてなかれのけしきなどに、秋よは、をさ〻たくまで、紅葉のちりとぶるうたくるあしたやり水よりは、煙のたつなどたうー〻ものうれはてゝ、人ごとふいとぎあつるはぞ、又ゐくと哀なるものうてゝ、みる人もなき月の、宵〻くもある、井ゐあまれなるこ

そ心ばそきものなれ。御佛名、荷前の使たつなど
ぞ、袁こやんごとなきさ。ろ事ども、さぐく、皆のいそ
ぎにとりかこねて、もうほーれこうふけるこさまま
ぞ、いみじきや。退離なり、四方拜につづくこそた
もーろくれ。つごもりの夜いとうくきに、松ど
もさもーて、夜まもぐるまで、人の門をきはす
りあるきて、何事ようあーん。とぐーくのさ
まて、是をこふまどしつゝ、曉がたまで、さもがよ、
言ふこなわめるこそ、年れ名残も、心ばそそれ。
なきくのくる夜とて、たまこつるわざは、四ころ

都ふ、なきを、あづまのかこるこそ、殊もこと
てあるーこそ、あはれなれ。かくて、あくゆく
空みけーき、ゆるにかはりもとみえねど、い
きかへめづーきこちぞする。大路のさま、松
たてこーて、はるやうにうりげするこそ又
あはれなる。
よろづのさとも、月みるにこそ、なぐさむものな
れ。ある人の月ばうり、おもーろきものはあーど
と、いひーに、又ひとり、露こそあはれなるもと、あ
そひーこそおうーれ。をわるよれば、なるようは

あはれなるーざーん。月花ふさーなり。風のこゑて、
人の心をつくめり。岩にくだけて、きよくあがる
る、水のけーきこゑ、はをもわうぎめでたし。
齋宮の野宮にはすーまゝもあわさまこゑ、やさー
くれもーろきこゝの、かごゝろをそなぶえーふ笙
佛などいみて、なのごゝ、深紙などいふるも、だう
ーぢゝて、神の社こゑ、けてぐーくなまめーる或
ものなれや。ものふわーる、まわけーきも、だ
なーぬーる玉がき三ーて、榊さゆかーる
あどいーぐーぬかそゝとにおのーきは、伊勢、

賀茂、春日、平野、住吉、三輪、貴布禰、吉田、大原野、松尾、
梅宮、
嵯峨川の、渕瀬、ゆーぬ、ゆーつ
見、ことゝも、なのーみかるーびゆきかひて、はる
やーるもーあーもも、くーるぬのらとるわかは
らぬもみーうは、人あーたまりぬ。桃李、ものいはず
は、誰とさもまう、昔をかーんぷーてみぬいま
しへの、やんごとあーうわーん。嵯のみぞいとはう
なき。京極殿、法成寺などみーこゑ、志とゞまり、こ
と変ーぐーくーさまは、あはれなる御堂殿の作り

みぐしせ給ひて、荘園おかくよせられ、我はぐら
のゝ、御門のまうーろみ堂のかゝめとしゆく末
までとおぼしおきし時、いうるんせのもかば
うあせはてんとハおぼしてんやゝ大門、金堂か
どちかくるでありしうど、正和のころ、南門ハ、や
けぬ。金堂ハ、さほたるふれ、ゝまゝまゝて、とわ
たつるまぢもあー。無量壽院ぞうぞ、さかとと
て、のこるまうう。丈六の佛九躰いとたふとくて、ふ
らびおはすーまた約成大納言の額、無約ぶかゝる
扁、あぶやうにみゆるぞ。衰るる。法華堂などもい

。ちぐる
らの詞も、あり
をりとゝ、敬
語ゝて、對話の
時ゝ、用ふる詞
ちう。さうゝ、徒
然草ゝハ、つね
ゝ、對話を區別
せぐるハあやま
りちう。なゝふ
べりゝぐ。

まぐ侍るめり。是も又いつまでぅあゝんかはゝの
ゝの名おぶにきき所ゝハ、おのづゝぶーぢ是
ばうう、のこるもあれどぶぐかる土ゝ人もふ
ーぶれバ、筆ふみざーんそるでを思いおきてん
こそ、ばうふ、うべゝそれ。
御國ゆづりの節會おこるはれて、叡慮内侍所お
たーまらゝ、ゝ、ゝ、かぎりまう心ぼそゝれ。新
院のおかさせ給ひての春、よりゝ、せ給ひるゝとゝや
とのもりとものみ中つこゝそにーてはう
こぬ庭に花ぞちるゝく今の世れごとぶづきに

まぎれて、院まで、氣ちる人もあきぐさびしげなる。
かゝるをりふし、人のこゝろも、あゝはれぬべき。

㊀涼閑の年ばうの、袁まる事ハあゝじ。いろいろ所所
のさまなど、ねあをさげ、あゝの法の蘆をかけて、布
ぬきう、あゝくしくゝ法調度ども、おろそかよみ
な人のさうぞく、太刀卒緒まで、吳格なるぞゆゝ
しき。

㊁九　ちづうふあもへバ、よろづに、過ぎにしかゝの意
しさのそぞぜんかゝるき。人ちづまりて後、なぐ
きよのもさびよ、ふまとふき、ぐそくとり出ゝ

めゝのうしたうぐとなるよ、反古などやりをつゝ
中に、なき人のてゝ、ひ、ゆかきをさびしうみい
でたるこそたゞ、きをりれ。此比あゝ
人の文ぶに、久しくなりて、いうるをり、いつの
とゝなりうんとおもふ、袁まるぞかし。まゝれ
しぐそくなども、心もゝくて、かはりぞひとき、
いとかれし。

㊂十人のなき跡ばうの、かゝるきハかし。中陰の經、心
里などにうつろいて、便あゝくせばき所よ、あ
たゝいめてほのゝざども、いとなみあゝる心あ

わゝぐゝし。日数のはやくすぐるほどぞ、物みもい
ぬ。はてのひは、いとなきけなうたゞひとゝゝの事
もたゞ、我かゝこげよ、物ひきまゝめ、ちるゝに
ゆきあうれぬ。もとのもみぢに海わてぞゝゝ
かゝしき事は、おほうるべき。まつゞの事はあれ
うゝこゝ海のためいむる事ぞなどいつることを、
かぜうちのゝうに、ゆうはと、人の心は、なうた
ておぼゆれ。年月へてもつゆ忘るゝよはあゝね
どゝるものは、日ゝにうとゝといへるこゝろもれ
ば、さはいへど、ときはぎうちは、わゞえぬるやよ

しるゝごといひてうちもわゝひぬ。かゝはけう
ときゝ山の中にをさめてさるべき日ばうわまう
でつゝみれば、ほどふゝそとばも若むゝ木葉ふ
りうづみて、夕の風、夜れ月のゝぞおとゝふゝを
ぶたわゝる。思いいでゝ、西ゝ人あゝんほどゝそ
あゝめ。そも又ほどるゝうせて、向きつまるば
うちのもゝぐゝは、あはれとやはおもふゝさるは波と
ふわざもたえぬれば、いづれの人と名をゞたゝ
らぎ。斗ゝの者れ草のゝぞ、心あゝん人はあはれ
とみるべきをばてはゝ、見ゝむをゞゝ松もふとせ

をまゝごとに、新しくごうれ、古墳いとかれて田とふわぬ。其かゝくだよ、なくたなわぬるぞ、かゝしき。

(三十四)

雪のかゝもろうふわたかーあた人のかわいふべき事ありて、文をやるとて、雪のこと、何ともいはぐわーー返事に、雪いうぐみると、一葉のたまはせぬほどのひぐゝーかゝん人の仰せらるる事、きゝいるべきかさかへもぐくちをきき法心あわと、いたりーこそ、だうーかりーう。今いきく人をれば、かばうわの事も忘れがゝー。

(三十五)

朝夕、へゞてなくあれる人の、ともある時、それは心おきひきつくろへるさまに、みゆることを、今文かくやかなどいふ人もあわぬべそれどなかげゝくしくおきく人うれとぞだがゆるうとき人のうちとけゝる事ぞいしいる、又ーと思いつきぬべし。

(三十六)

名利はつうはれて、志づうたるいとまもなく、一生を苦しむることをだろうるれ。財おわくれば、身をまもるにまず。害をかい煩をうねくおうだちるわ。身はほゝい、金をーて、小斗をさゝふとも人のためうぞもづらはるべき。おろうる人の目

をうろこばしむるたのしみ、又あぢきなしとふ
る車、こえたる馬、金玉のかがやかも、心あしんん人ハ、
うたておろかなるかとぞみるべき。金ハ山よりをて、
玉ハ淵よりなぐべし。利にまどふハ、をぐれておろ
うなる人なり。うづもれぬ名を、あぐべき世にのこ
さんこそあしかるべけれ。位たかくやん
ごとなきをも、をぐれたる人とやいふべき。
おろかにつたなきく人も、家にまれば、あへば言
き位なるのぼりをごりをきはむるもありぬべし。
かしこ賢人聖人みづからいやしき位なる時、

ふあはぢしてやみぬる、又ほこりたかぶる人、うるき
つたき位をのぞむも、次におろかなり。智恵と心
とをして世にをぐれたるほまれものこさまほ
きを、つたなき男人ハ、ほまれを愛するハ、人のきい
をどろかさぶなり。ほむる人、そしる人、ともに世よ
とゞまりぬ。後のきうん人、又ほめやうにさる
べし。誰れをこのはぢ、誰れをうきほまれんことをねが
うん。譽ハ、又そのあるなり。劣れるの名、のこり
て文に益なし。是をねがふも、次におろかなり。但
主ついて、智をもとめ、賢をねがふ人のためにハ

ハ、智恵ひいでゝハ、いつはりあり。才能ハ、煩悩の増長せるふり。待つてきゝ、学びて出るハまことの智にあらぬ。ぞうするをゝ智といふべき。可不可ハ、一條なわいうるをゝ、善といふ。まことの人ハ、智もなく、徳もなく、功もなく、名もなしたれうゝ出わかるゝ。つたへん。これ徳をかくし、愚をまもるハあらじ。ぞんぶんなわ、賢愚得失のさかいを、らざれバなわ。まよひのこゝろをもつて、名利の要をもとむるにかくのごとし。萬事ハ皆非なり。いふにたらぬ。ふぐふにきわまれ。

唐橋中将といふ人の子に、行雅僧都とて、教相の人の師なる僧あり。氣のあゞる病ありて、毎のやうゝたくるほどに、はなの中、ふさがりていきもいでかゝうれバ、さまゝにつくろひゝれど、ものづらはくなりて、目眉額などもはなはだしておもひくれバ、物もみえず。二の舞のおもてのやうにみえけるゞ、たゞおそろしく鬼のかほなるあつて、目ハいたゞきのかさにつき、額のほど、鼻ゝなりなどしてほハ、坊のうちゝ人もみえぬ。こもりゐて、久しくあつて、猶ゝづゝ

くゐかて、さに〳〵けり。かゝるやうひも、ある事にこそあれ。

春の暮れつかた、のどやかにえんなる空ふいやしかゝぬ家れおく〳〵ふうく、ぬぐちものふわて、庭よ草きをしくる花みもぐ〳〵がきをさし入てみれば、南面の格子、みなはらしてさびしげなるに、東よむきて、つまぐのようきほどふあきらるみものやぶれうみれば、かさちきげなるをとこの、年せげ。わまて、うちとけたれど心よく、のどやうなるさまして、机のうへよ文をくわひ

ろげて、みるまわ。つうるる人ありけんたづよきうまわし。

あやゝしの、竹れあゝ戸れうちわいとわうき男れ、月新よいろあいさぶうまふねど、つやゝうふる狩衣ふ、うきさゝぬきいとゆ恵づきたるさうふまて、さゝやうるるわゝはひとわをぐして、げるうるる田の中れほそ道を、稲葉の露よ、そぼちつゝ、ぬけゆくほど、ふえをえるゝばふきさびまる、衣ときゝ土るべきくべとあゝとおるふり、ゆうんかゝ、土ゝまほゝくてみたくりつゆけ

ば、ふえをふきやみて、山のきはふ、勢門のあるう
ちにいるまぬ。榻ゝたてゝ、車のみゆるも、都より
は、めゝしくもゝちして、下人などへぞ、さつぐ〜の
宮ぬ、おはしまさはて、法佛事などゝ、ぶ〜ふよ
やとゝいふ。法堂のかゝ〜、法師どもまゐりたり。狩
衣の風よ、さゝはれくるゝ、そ〜だきもの〜匂ひも、
効よさむゝ〜ちを。寝殿より、法堂の廊よ通ふ、女
房ぬ、おひうぜよういるゝど、人めふき山里ともい
ちぢ、心づひしゝ。心ぬまに、さぶ〜ゝる、秋の
野らは、おきあるこちあるようづもれて、むしのよ、か

ち、とがまく、やかみづのれと、のどやかなり。都
のそゝよりは、雲ぬゆき〜もけやき〜ちして、
月ぬぱれくもること、定めがゝ。
公卿の二位の、せうとに、良覺僧正と聞えしは、き
はめて、腹あしき人なりけり。坊のかゝはゝ、小大
なる榎の木ありければ、人、榎の木ぬ僧正とぞい
ひける。此名ぞうるべかゝりけるて、彼の木を、き
りうゑ。其根のありければ、きりくひの僧正と
いひけり。いよ〜はら〜だちて、きりくひをぬりす
てたりければ、そあと、大きなる堀ゝて、ありけれ

ば、堀池の僧正とぞいひける。

(四十七) ある人清水へまゐりくるに、おいたる尼ぬけ、つれたりけるが、道もがらくめくとづひきてゆきければ、尼はあの事をかくはのたまふそとさひけれども、ゝへもせぞ。猶いひやまざりけるを、たびゝとけれてうち腰だちて、やゝさるひけるは、かくまでなげくめるなりともせば、やゝさのい君ぬひえの山は、見てだにまもらず、たゞ今もやはきのひたまはんと思へば、かくやぞかゝといひけり。ありがゝ美こゝろざしなりけ

(四十八) んかゝ。

光親卿、院の家勝講奉行してさぶらひけるを、御前へめされて、供御をいざされて、くはせられけり。さてくいちらしたる、ついでさねをみをの中へさしいれて、羅出ゐたりけり。女房あふきたる、誰よとれとてうあどやあはれ、有職のふるまひ、やんごとなき事なりとかへもぐ感ぜざりきたまいけりとぞ。

(四十九) 老いぬれて、始めて道を行ぜんと、まつ事ふうれ。ふるき塚おほくはてれか年の人なりぱゝざ

つふ、病をうけて、たちまちに、はをさしんとも
るはずゝこそ、はじめて、過ぎぬるかうの、あやまれ
うこと、をさまるなれ。あやまりとは、他の事
にあらず。速にもべきことをゆるくしゆるくも
べきことをいそぎて、過ぎにしこの、くやしき
あかごもはくゆともかひあらんや。
仁和寺にある法師、年よることゝ、石清水ををがま
ずかうしば心うくおぼえてある時、おもひたち
てたゞひとりかちより、まうでゝ、極楽寺高良
あどををがみて、かばうかと心えてゝ、へかにけ

り。さて、かゝへの人をあひて、年ごろおもひつる
事、はたしはてぬ。ゆゝしう過ぎてたゝくこそ、
おはすれ。そも、まゐりたる人ごとに、山へのぼ
るに、何事うあらんゆゝしかりしかど、神へ
まゐることこそ、ほいなれとおもひて、山までは、みゝ
とゞいひくるを。さらの事なほ、先達はあらず
はしまさるなるか。
是も、仁和寺の法師、童の法師まゐりしとゝる名
おもて、各あそぶ事あるに、思ひて、無まいる
あまりかゝはしまるゝ、あゝがるゝをとりて、頭に

のづきたれば、つまるやうにそくそくと、鼻をかむ。ひらめて、かほをさしいれて、鼻出るに、満中臭よいることかぎりあり。さげ。かるでいほぬうんとともるに、ねほうこぬうれぞ。酒宴ことさめて、いのぐいせんとまぐひくわ。かくもれば、くびのまはりかゝて、血たわ、たゞ腫れまはれみそていきもつまりくれば、うちらうんとをれど、たやをくわれば、びきてたへぶこかわくれば、うるはでもべきやうなくて、三あーるつのーうへゝ、かゝびゝをうちかくて、あをひきを出をつうせて、京なるくもしのがわ、ゆてゆきくる道をかゝ、人のあやーみかること、かぎわふー。醫師のもとに、さーつるて、ひういみるわうんあわさかさこそ、さとやうるりくめ。物をいつも、くぐもわぐるふよ、いきてきこえば。かゝる事ハ、文まもみえぞ。つたへふるをーへも、なーといへぞ、又仁和寺へ泊りて、ふーきもの、おいたる母など、枕ぶみよりわみて、なきかれしーめども、きゝーんともおぼえば。かゝるほどゝ、あるものゝいつやう、たとひ、耳鼻こそ、きれうをとも、余ばうわハなゞのつさざ

らん。たゞ、力をたてゝ、ひきたるへとて、さゝの志べを、まなかにさしいれて、かねをへゞていくびもちぎるばうか、ひきさるにみゝはふかけうげふゞゝ、ぬけまくか。かゝき傘まゝけて、ひさゝくやみゐるふかくか。

御室にいみゞき児のありけるを、いとゞ、さゝそいゞゝてあそばんとたくむ、法師どもありて、純あゝ、あそび法師どもなどかゝゝひて、風流れ改ゐやうのもの、念法ようるを出て、箱風情のものにさゝゝめいれて、ふゝびのまゝ、便よき所

を、うづみおきて、紅葉ちゝかけなど、思ひよりぬさまして、御所へまゐりて、児をそゝのうゝいでにくか。うれしと思ひて、ゝかゝこ、遊びめぐりて、あかつる苦の野むろにゐみゐていたうしそ、ちうじにゐれ。あはれ、紅葉をたうん人もが如、験あゝん僧ゝちゝ行りゝゝろみゝられよ、ふどいいさろいて、うづみつる、木のもとにむきて、数珠おゝきか、ゝ、ことゞゝくむをびいで、なゞゝていらるゝふるゝひて、木葉をかきのけたれど、つやくものもみえぬ。所のたゞひゝるゝやとて、ほゝ

ぬかもるく心をあされども、あうかう。うづみけるを、人のみおきて、御所ぬくまかりたるさに、ぬもめるるわけか。法師どもたとのはるるてきゝまくゝいさゝいはゝだちて、海カヨふめ。あさかに、奥あゝんとるる、必ずあいるきものあか。久ゝくへぶゝつて、あひる人の、ゆゞ方にあかつる事、数さに、ゆりるくからりでくることあいあゝれ。へだてるくるれぬる人も、経へてみるる、はづゝうゝかゝぬゝゐい。つぎざまの人ゝあゝうさきに、立いでゝも、奥ありつることゝてゞさもつ

ぎあへどゞかゝるる奥ぞるるぞかゝぶき人のものがたりもるゝ人あるるあれどゝいとかにむきていふを、ゆのづゝゝ人もきくにしてあれぶからぬ人ゝ誰ともるくあるるのゆにうちいでゝみることかやうにかゝわるをバ、みふれるすゞく笑ひのゝ上るいとらうがはけゝ。ぞうき事をいいてもいたく奥ぜあると、奥るきことをいひても、笑ふるぞ品のほどゞそうれぬべき人のみぞまのゝすゝあゝぞえある人ゝそのことをゞさぶめあへるゝゆのゞ効にひきかけていひいでたる、

いとゞしい。

㊱ 人かゝりいでたる、歌物語の、奇のゐうきゝて、ほいなくれぢをこゝにはぢ道さゝん人いみゞと思ひていかゝゝゝゞぢをぐて、いとも さゝぬ道の、物語しるゝゝはゝいるくきゝまくゝ。

㊲ 大事をたゞいたゝん人ハ、さわがゝく、心よかゝらんことのほいをとゞげずして、さあゞゝ、さつべきあわぢ、ぢ事はて、ぢなゞくゞ、彼事さゞしおきて、さつゝゝのことゝ、人ゝ朝やあゝんゆくを、羅ちゝくさつゝゝめまゝはけてゞゝゞゝゞゝもあれゞこそあれぢをことまゝん程あゝゞ物さゝゞゞかゝぬやうになど、思はんゝをゝえさゝぬ事ゝをいとどかゝちかてゞことのつくるかゞゝわもなく、思いたつゝもあるべかゝずおぼやう人をゝるに、をこゝ、心あるきはゝ、皆こゝのあゝまゝゝとてゞ一期ハをぐめるぢゝきゝ大ゝなゞゞにぐる人ハさゞばゝとやゝゝゝ勇をたゝけんとゝれゞ恥をもゝのへゝみゞ財をもゝて、のゞれゝさるゞかゝ命ハ人をまつ物ゝは無常のきゝたゝることゝも水火のせゝるゞゝわも、遠にのゞれかゝゝきゝものを其時先いゝゝ

親、いとけなき子、君の恩、人の情、をとてがぐーとて、
拾てざーんや。
真素院ゑ、盛親僧都とて、やんごとなき智者あ
ひくわいもがーらといふものをこのみて、おほく
くひくわ。淡義のゆゑてもおほきなる鉢ようづ
だらくもりて、ひざもとにおきつくしいろ〳〵、
文をもよみくわ。煩ふことあるにい、七日二七日
ふど、療治〳〵てこもりゐて、思ふやうにおきゝ芋が
ーらをえ〳〵びておほく喰ひてよろづの病をい
やーくわ。くゑはもろるーだいとりの

みぞくひくるぎそめてまづーかわくるに、所直
弘ゑどぐふに、銭二百貫と、坊ひとつをゆづりたり
くるを。坊を、百貫にうりて、かれられ、三万疋をい
もがーらにあーとさぶめて、京なる人ゑあづけ
おきて、十貫づーとわよせて、芋がーらをとも
かーそめーくるほどゑ、又こと用に、もちゐる事
おくて、そもあーみるに成ゑくわ。三百貫の物をま
づーき方にまうけて、かくばうーひくるまことに
に、ありがーき道心者なりとぞ、人やるゑ。僧都、
ある法師をみて、ちろうりとゆ名をつけた

りくわ。とい、何物ぞと、人のといそれば、さう物を、我もとてぞ。もーあるまーかぞ、け僧のかほよ洲てんとそ、いいそる。け僧数みめよく、力つよく、大食して、能書学匠、毎説、人をもぐれて宗の法燈をれば、寺中をも、おもく思はれたりそれども、学をかろくおもいろくせものにて、ろづ自由うて、大方、人をとりがつといふことふー。出仕して、饗膳をぐにつくはも、みふ人の家をもそそをまーぐに我前をもあれば、やぐていとわうちくひて、ゆりたそれば、いとわついたそてゆきそわ。

この一段も、信といふことを、説く為のたとへ

とき、非時も、人をいとーく、宝めてくはぐ。ぐく、ひたき時、物をうも、暁をも、喰ひて、ねぐたそれば、ひいもかけこもりて、いうをる大事あれども、人のつふことき〜いれど。月さめぬれば、ぐく物をいひぐ。心をもまーて、うそぐきありきあぐ、ようつねをぬ、ぐまをあれども、人をいとはれぐ。ろづゆそそれそわ。徳のいれりけそそや。

紀紫に、ふぐ〜の押領使、などいふやーをるもの、ありそそが、去おほひをろづに、いそぐき薬とて、鈴ごとに、二つぐ〜やきて、喰ひそる事、年

まて、おろそかに、かゝることのあり、ーまえあらざるべし。

いとゝくるあちぬ。或時、舘のうちに、人もあるうけるひまをはうかゝて、敵だゝそひきたりてかこみせめ〳〵るに、舘の内に、兵二人いでゝて、命をすてゝ戦ひて、みな追返してけり。いとゝ、ぎにおぼえて、日は、こゝに物したまふとも、みぬ人〳〵のかくたゝかひしたまふ、いとのある人ぞと、ほいなれば、年ごろたのみてあるふ〳〵めーつゝ、つちおほひらに、さぶらふとといひて、うせぬるなり。ふうく信をいゝぬれば、かゝる徳も、あり〳〵るなるべし。

元應の、清暑堂の御遊に、言上ハうをきゝは、蓮亭

のおとゝ、牧馬を弾じ給ひしるに、坐について、まづ、柱をさゝられたりしれば、ひとつおとゝにゝめ。ほふとゝろに、そくひをもち給ひたるうて、つけられしゝれば、神供のまゐるほどよ、ふくいて、ことゆゑあるうゝめ。いうなる意趣うありゝん。物みゝるゝ、きぬのづきの、よめてはるうて、もとのやうにだきたりゝるとゝぶ。

名をきゝすゝ、やゝて、面新ハ、ゝはゝるゝ心ちとゝをみるはハ、又かねて、思ひつるまゝのかほゝゝる、人〳〵そあゝし。昔物語をきゝても、けは

の人は家のそこほどとてぞ、あわうんとたぼえ、
人も、今みる人は中に、思いよそへらるゝは、誰も
かくたぼゆるゝ也。又いつのあるをわぞ、今人の
いみ事も、めにみゆる物も、ゆゝ心のうちもかく
るゝこゝろの、いつぞ也あわゝがとおぼえていつと
い思いでねども、まさしくあわゝ心ちのとる
は、我ばうわかゝおもふる也。
いやしげなる物、ゐるあるに、調度のおほき、
硯は、筆のたほき、持佛堂に、仏のおほき、前栽は石
草木のおほき、家の内は、子孫のおほき、人は、年て

詞のたほき、願文に、他善おほくかきのせさる、た
ほくてみぐゝかゝぬは、文車の文、塵塚の塵、
世にかゝりつたゝること、誠はあいるきる也。多
くいみを虚言あわ。あるるも過ぎて、人は物をい
いまをたまゝて、年月をぎさかいもへぐゝりぬ
れば、いたきまゝに、かゝりあゝて、年をもかさ
ぐめぬれば、やがてさぐるぬゝるゝの物は
上まのいみぐき事ふどかゝるゝる人の、を道
出ゝぬ、そぐろに、神のごとくにいへども、道出
れる人は、文に信もおゝさぐ、音をきくと、ゐると

きとゝの事もかはる物なりかたにあらはるゝを
もかへりみぞ口ふまうせていひちらすやゞ
てうきたるごとくきゝゆ。又我もまことゝかゝ
ぞハ、たゆひあゞゝ人のいひ〳〵まゝに、鼻のほど、
をゞめきていふ、さゝ人の、空ごとゝハあゝぞげ
ゝ〳〵、あゝらちなほめきよゝ出ぬよ
ーてさりあゞ、つまゞ〳〵あはせて、語ゝ空ごと
ハ、たそろゝき事あり。ゞゞだめ、面目あるやうに、
いはれぬる虚言ハ、人いきゝあゝかさぞ。皆人の
奥ぞる虚言ハ、いとゆさもあゝゝものをとい

はんも詮なくて、きゝみゝるほどふ、證人よさへ
ふされていとゞさぶまりぬべゝ。ゞまもかくま
も、そゝごと、たゞほき世をかたゞつねよあさめづた
らーかゝぬことのまゝに、心えさゝんよろづた
がゆべゝうゞゞゞぞるの人ゞ物語ハ、耳おどろく
事のゝあゆぞき人ハ、あやゝきことを語ゝぞ。か
くハいへど、佛神の寄特、権者の傳記さのゝ信ぜ
ざるべきもあゝゞゞこれハ、世俗の虚言を、念比
な信ゞゝるもをこがまゝくゝもあゝゞるゞい
ふも、ぜんあるれバ、たゝかさハ、まことゝくあい

まつ、いて、偏ゝ信ぜざ、又うたがいあざけるべからず。

蟻のごとくにあつまりて、東西にいそぎ、南北にもとめ、こゝろきあり。いやしきあり。老いたるあり。わうきあり。弱く劣あり。強き者あり。夕よりして、明におく。いとなむ所、なるごとくやすきをむさぼり、利をもとめて、やむ時なし。労をやしなひて、仮事をうまつ。期する所、たゞ先と死とにあり。そのきたる事、きみやうにして、念〻の間なとゞまらじ。これを待つ間、なるものたのびうあんまどへるものゝ、これをおそれず。名利をおぼれて、先途のちうきことをかへりみず。はるかふるく人は、又是をかなしむ。常住ならん事を思ひて、変化の理を、まつ、ねがはざるあり。

世のおぼえ、はなやかなるあるあるに、なゞきもよろこびもあり。人おほくゆきとぶらふ中に、いまわ法師のまゝりていたるをみるこそ、さらにともとみゆれ。さるべきゆゑありとも、法師は人にうとくてありなん。世中に其代、人のもてあつかひぐさにいいあへる事、いろふべき

まかあ〜ぬ人のよく案内さとりて、人をもかゝるめ
こゝろをとゝいき〜たるこそ、うけられぬことよ、か
たほとゝなる、聖法師などぞ、世の人はうへい、我
ごとくたづねき〜、こゝでかばうゆい、さとりえん
とおぼゆるまでぞいたゝきもめる。
今やうの事どもの、めづらしきをいひひろめも
てあそこそ、又うけられぬ世にことふれたるを
でさとゝぬ人い心よくく。今更の人などのある時、
こゝもとよいいつけふることとを、物の名など、
心得ふるどもかさはいいうはす、目みあはせ、

わゝいるどもして、心さとゝぬ人ゝ心得を思はもろ
事、よふしぶ、よかゝぬ人のかるゝびあることを
ゆ。
㊤ 仏事もいかたゝぬさまーたるぞよきぞ。きく人い、
さとりふる事とて、さのゝ、さとりがるやいふ。か
た田舎よりさーいでたる人こそ、ふるづの道を、
心得たるふうのさーいゝくいはれ。されば、世に
はづうきかるもあれど、みづうもいみーと
れもへるけーきかたくふるわ。よくふるまへた
る道をは、必ぞ口たもく、とはぬかぶりいはぬ

(八十)

こそいみじくれ。

人ごとに、我劣にうとき、事をのゝしるこのめる。法師は、兵のみちをたて、えびをは、弓ひくをべきなど、仏法をたゝかふるきそくゝ。連歌、管絃をたしなみあへわぶれど、おろうるるなのれが道よりは、猛人よりおろいあがづゝれぬべし。法師のこゝもあらむ。上達部、殿上人がゝざまもてはやすべて、武をもつのむ人おほのめ。百たび戦ひて、百たび勝つさも、いまゝ武勇の名をさゞめかゝ。故は、運よ京じて、あたをくぶく時、勇者よあゝむとい

(八十一)

人なし。兵つき、矢きはまりて、つひよ敵よ降らむ、弧をやをくゝして後、始めて、名をあらはすべき道あり。いけらん程は、武よほらるべうゝ。人倫よさほく、禽獣よちうきゝ振舞、ち事にあゝむはこのみて益なき事なり。

屏風障子などの、絵も、文字も、かゝるべう、書やうゝてかきたるが、みよくきよりも、宿れあるのつたなくおぼゆるなり。大かゝ、もてる調度よても、心ばせのゝ事は、ありぬべし。そのゝよきを、もつべしとるもあゝむ。損ぜざゝんた

めとして、品なくみにくき様さまに成ぬ。めづらしかるんとして、用あきことゞも成へわざらはしくこのミなせるをいふなり。ふるめうきやうとていたくことぐしうしぐ、つひへもなくて、物ぐるのようきぐ、ようきなり。

（八五）

法顕三蔵の天竺よりかへりて、古びの扇をみてハ、かなしび、病ようふしてハ、漢の食をねがひ給ひけることをきゝてさばうりの人に、無下にうゑ心よろき氣色を、人の國にてみえ給ひ、れと、人のいしに、弘融僧都、優なる情あり。三蔵うふとい

（八六）

ひふしてうゑ、法師のやうもあるぞ。心にくゝおぼえそうら。

人の心、そふほゝ〜ねぎ、偽なきにしもあらぐ。されども、あのづから、正直の人なゞうゑうゝんだのれもるほゝ〜ねど、人の賢をみて、うゝやむ、尋常なり。いもりておろうる人、たゞ〜賢ふる人をみてこれをにくむ。おほきなる利をえんゞためにそうき利をうけぎ、偽りかゞりて、名をたてんとそそる。おのれぶ心よ、たゞへふよりて、山嘲りをあるをにて、ものぬけ人ハ下愚

の性、うつるべうつるべ、偽りて、小利をも辞をべう
らぞ。かりそめも、愚を学ぶべうべ。狂人のまねと
て、大路をはらば、則狂人なり。悪人のまねとて、
人をころさば、悪人なり。驕をまねぶ、驕のたぐ
い、犀をまねぶ、犀の徒なり。つはりても、賢を
まねばんを、賢といふべし。

ある者、小野道風のかく、和漢朗詠集とてもち
うりくるを、ある人、法相傳うけることなき、侍ら
じ。あれども、四条大納言えばれうるものを、道
風かくこと、時代やたがひ侍らん。なぶつうあ

くしそと、いひくれば、さいへぞうそ、世にありが
たきものゆへ、侍るくれとていよ〳〵秘蔵し
くり。

奥山よ、猫まさといふものありて、人をくふ。ふ
ると、人のいひくるに、山ねこ〳〵ねずみ、これ〳〵なり、
猫のへあぶりて、ねこまさになりて、人をくる事、
あるる物をといふものありけるを、ふる阿弥陀
佛とうや、連寺〳〵くる法師の行願寺のるまよあ
るくるぶき〳〵て、ひとりありかん為、心をべきこ
とにしそと、れもひくる法〳〵も、或示そ、我よくる

まで、連奇ーて、ぶひとゆりけるに、ふ川のはさまて、音こきこ、猫まこ、あやまこ、ぶ、あ、もとへふとよりきて、やぶてかこつくるに、首のほどをくはんとも。肝心もうせて、ふせぶんともるに、力もなく、足もたゝぶ。ふ川へころびいりて、たをけようや、ねこまこよりや、猫まこ、さけべば、家こより、杓どもとも、ーて、ぱーまこりてみれば、ぱもこ、ぶふ、みぶ、ふ、ふる、僧まの。こい、うにとて、河の中よりいぶきれこ、れば、連奇のかけまのとりて、扇小箱など、懐こ持ぶ、ぶりこくも、水こいりぬ。希有

うーてたもかりたるさまて、はよく、家こいりにくの。かひくる犬の、くくれど、こを出りて、こびつきたりけるこぞ。

大納言法京のめーつうひー、乙鶴丸、やもこ、屋と、いふものを出りて、つ、ひにゆきかよひー、に、ある時、いでいかへりきたくを、法京、いづくへゆきつるぞと、とひーるば、やもこ、屋のかりまうりていふ、男う、法師こと、又とはれて、袖かきあはせて、いうぶいくん。頭をば、みいいびとこたへ、きぶ、どう、頭ぞうりの、みそざりくん。

或人、弓いる事をゝしふに、もゝの矢をたゞしくみて、的にむかふ。師の云、初心の人、ふたつの矢をもつ事あらんは、のの矢をたのみて、はじめの矢に、なをざりの心あり。毎度、たゞ得失なくこの一箭に、定むべしと思へといふ。わづらひに二の矢、師の前にていとゝつをおろうよせんと思はんや。懈怠の心、みづから出でゝ、ぞといへども、師これを出る。この いましめ、万事にもゝるべし。道を学ぶ人々は、初あらんことをおもひて、かゝりて、懇に備せんことを期せ。いはんや、一刹那のうちにおいて、

懈怠の心、あることを出でゝんや。まんぞ、只今の一念において、たゞちにもゝることの、甚かゝるべき。

堀川相國は、美男のたのきこえ人にて、ときゝもとあく、過差をこのみ給ひ、ものゝ沛子基綱を、大理にふして、廳務をこたはれ、ゝるに、廳屋の唐櫃、みづからをて、めでゝ、つくりあらためらるべきよし、仰られけるを、此唐櫃は、上古より傳りて、さ始めを出でゝ、数百年を経もの。累代の古幣をもつて、規模とせ。たやすくあらためられがたきよし、故実の諸官等、申されば、その事やみにけり。

(裏)

小のやかげよ、きえのこりたる雪のいさうこほりたるにさしよせしる車のるぶえも、霜いたくさゆめきて、春明の月、さやかなれども、くもるなくいあるぬよ、人ばなれする御堂の廊よ、あるくよいあるぶとみゆる、男、女とあげーに立ちかくて、ものがたりもするさまして、何事ぞうあるん、つきもまどろしかぶーぶらるるぶ、いとうーとみえて、えもいはぬるひのさとかをりたるしそだうーろしげもひるぶ、ぱつれるくきこえたるもゆうー。

和文教科書一之巻終